今月のことば　　令和6年（2024）7月　<No.215>

深く生きる

仏教の話は難しく、とっつきにくいと感じている方が多いと思います。「うさんくさいもの」という偏見も、いまだに根強くあります。大阪大学名誉教授を務められた僧侶・大峯顯さんは、日本社会にあるこうした誤解を取り除き、仏教の本当の大切さを伝えることに生涯をかけて取り組まれました。

先日、宗門のある大学にお話に参りました。話を始めましたら、途中で二、三人の娘さんたちが、イビキをかいて眠っているのです。後ろの方では、お喋りを一生懸命している人もいます。現代の若い方には、直にお念仏の教えに入るのは少し無理かと思うのです。…

「弥陀の方便ときいたり（時至り）」という和讃があります。…
阿弥陀さまはお念仏の方へ向くようにあれこれと方便なさってくださっているのですが、凡夫の方に**時が熟するということがないと、仏法の方に向かないのです**。だから、さっきの娘さんたちには未だ時が熟していないのかもしれません。

『本願海流』大峯顯 著　より

「時が熟す」とはどういうことでしょう？　それは人生における大きな困難に出会い、**「この世が楽しい」とばかりは言っておられないと気付いた時**ではないでしょうか。人それぞれに気付くタイミングは違うでしょうが、大峯先生は、「まだ元気で若いうちは楽しいことばかりに目がいってしまう。だからこそ、年を取ることは決して悪いことばかりではない」と言われます。

年を取るということは、人生が深くなるということです。…
年を取ったり、病気になったり、生活上のことに苦しんだり、愛憎のことで苦しんだということは、何か損をしただけのように思いがちですが、それは必ずしもそうではないのです。…

仏法の世界というのは不思議な世界でありまして、人生の損失だとか不幸がそのまま有り難い利益に転じられていく世界です。阿弥陀さまのご本願に遇えたということがあれば、**人生の本当に大事なものに目を覚ました**ということでございます。いろんなことがあって思い惑ったけれども、そのどうしようもない私を救おうと誓われていた、阿弥陀さまの悲願というものを分からせてもらえたということがあれば、これで**本当に深く人生を生きることができた**ということです。

これを読んでくださっている方々にも、さまざまな苦悩がおありだろうと思います。年齢に関係なく、楽しいことに目が奪われたり、苦悩に引き戻されたりの繰り返しで人生は過ぎていきます。しかしその中でも本当に大事なものに気付けたなら、それはきっと、二度とないこの命を「深く生きた証」ではないかと思うのです。

慧日山 真光寺